

十三湊周辺遺跡等の会員研修

津軽における歴史を訪ねて

樋爪館懇話会では、10月20日から21日の日程において、青森県の十三湊遺跡、亀ヶ岡石器時代遺跡等の視察研修を会員ら12名参加の下に実施した。

現地ガイドを依頼し、十三湖周辺については、五所川原市の”安藤の郷応援隊”より、亀ヶ岡石器時代遺跡については、つがる市教育委員会文化財課より手配のボランティアガイドよりの説明を受け、津軽半島における歴史と考古学への理解を深められた。

主な二つの遺跡においては、次のようなガイドであった。

十三湊遺跡は、津軽半島の日本海ほぼ中央、岩木川河口に形成された潟湖、十三湖の西岸に位置し中世北日本の重要港湾であった。津軽安東(藤)氏が拠点置いて栄えたとされながら長い間幻の港町としてきたが、平成3年度以降において、当時の市浦村(現五所川原市)・青森県教育委員会等による組織的な発掘調査の結果、13世紀から15世紀に掛けた広大な遺跡が把握され、平成17年に国指定史跡になった。

亀ヶ岡石器時代遺跡は、有名な遮光器土偶等が出土し日本を代表する縄文遺跡として昭和19年に国指定史跡になっている。津軽平野の岩木川河岸にあり古くから造形的に優れた土偶や精緻な文様の土器が多数発見されており、縄文時代晩期に作られた土器に代表される文化を「亀ヶ岡文化」という。令和3年7月に世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つとして登録された。



安東(藤)氏の福島城門跡のある説明板において説明するガイド“安藤の郷応援隊”



世界遺産「亀ヶ岡石器時代遺跡」群それぞれをパネルや遺跡案内板にて説明する現地ガイドと聞き入る本会会員

《《《 11月～12月行事予定のお知らせ》》》

11月16日(水)	第135回 月例発表会	午後7時～午後9時 赤石公民館 講義室 発表者 石幡 信 テーマ「安東一族と十三湊の研修報告」 発表者 平井 和夫 テーマ「『吾妻鏡』に見る北条義時」 ※8/17の続き、配付済資料を持参のこと。
12月6日(日)	第28回 定期講演会	午後1時30分～午後3時30分 赤石公民館 講堂 演題 「比爪と海のつながり」 講師 羽柴直人氏 平泉世界遺産ガイドダンスセンター 上席専門学芸員、博士(文学)

10月19日に開催した第134回月例発表会において、発表者が用いました資料から一部分を抜粋して掲載しましたのでご了承願います。

石幡 信氏の「安東一族と十三湊」 会員研修の事前勉強会

十三湊と安藤氏 一古代・中世関係略年表

参考文献：国立歴史博物館1998「幻の中世都市十三湊」

弘前市1995「新編弘前市」資料編1(古代・中世編)弘前市史編纂委員会

青森市2005「新青森市史」資料編2(古代・中世)

年号	関連記事
文治5年(1189)	奥州合戦、源頼朝が平泉藤原氏を滅ぼす。安藤次・三沢安藤四郎ら源頼朝に加勢する。〔吾妻鏡〕
元久2年～貞応3年(1205～1224)	北條義時の執権時代に安藤五郎、義時の代官(蝦夷沙汰代官)として補任されると伝える。〔保暦間記〕
建治元年(1275)	蝦夷沙汰代官、安藤五郎が蝦夷により首を取られる。〔日蓮聖人遺文〕
正和年間(1312～1317)	《伝承》安藤貞季、十三湊に新城を構えるという。〔十三湊新城記〕
元応2年(1320)	出羽蝦夷蜂起、元亨2年まで続き、安藤氏の乱に影響を与える。〔鎌倉年代記裏書〕
元亨2年(1322)	安藤氏の乱勃発。季久(宗季)と季長の戦い。〔保暦間記・諏訪大明神画詞など〕
正中2年(1325)	蝦夷沙汰代官職が安藤季長から安藤季久(宗季)に代わる。津軽大乱が拡大する。〔保暦間記・鎌倉年代記裏書等〕
〃	安藤宗季(季久)、鼻和郡内諸職・蝦夷の沙汰・糠部郡内諸職を子に譲る。〔安藤宗季譲状・新渡戸文書〕

金濱興一氏の「勿来(なこそ)の関」

□ 宮城県の勿来の関 〒981-0103 宮城県宮城郡利府町森郷惣ノ関北

利府町にも古くから勿来川(名古曾川)惣の関と呼び親しんできた地がある。この地こそ勿来の関ではないかと考えられる。

近世の奥州名所図会に記されている。「郷民伝えて勿来の関と呼ぶ、山上に勿来関明神祠あり。この地奥州三関門にて胆沢鎮守府より多賀城府に通う要路なり」

この地は、大野東人の進言により出羽柵へ通じた道の関門となり、また奥郡へ通じ前九年、後三年の役では、どれだけ多くの兵士が往還したことだろうか。

平時にあっては商人の通行で賑わったのがこの道である。その「大道」勿来神社前にある説明板「板谷道」を実際に踏査し、当時の人々の思いに触れ文化を感じ取ることができる。なお、近年の諸研究によれば、この周辺に勿来の関が所在していたことが確実視されている。(説明板より)

□ 福島県の勿来の関 〒979-0146 福島県いわき市勿来町開田長澤6-1

勿来の地名

勿来関は、もと菊多(いわき市南部の古名)関と呼ばれ今を去る千五百有余年前に設置されたといわれ、白河関、念珠関と並んで奥羽三古関の一つとして名高い関所である。これを「勿来」すなわち「来るなかれ」と呼んだのは平安中期ごろからであり、北方の蝦夷の南下をせきとめるためであったといわれている。

関名は関の所在地の地名を冠するが、「勿来関」があったとされる土地には「なこそ」という地名(含小字)はなかった。「勿来」という地名が初めて世に出できたのは実は大正時代になってからである。(鈴木伸一「(蝦夷となこそ)の関」無明舎出版、2014)